



第127号

2017年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

学校教育における不易と流行

同窓会監事 小高 千代子 (S44・3卒)



もはや戦後ではないといわれた昭和三十年代後半、高校生だった私は、男女の給与差がない教員を目指した。教育は夢を実現させる力があると思っていたのである。

そして卒業後、中・高校、教育行政・社会教育を経験し、退職後は、家事調停委員を十年務めた。教育とは無縁と思った仕事の世界に触れ、逆に教育の無力さを痛感し反省することが多かった。

一例をあげれば「戦争」である。私は戦後生まれだが、伝える義務感を感じる。八月は戦争に関する報道番組も多く、七十二年たった今だからこそ話せる事実の悲惨さに涙することも多い。私の世代の者も強い関心を持ち続け、戦争回避を訴える義務があろう。無関心は無責任と同義である。

平成元年、教育行政に身を置いた時、指導要領の改訂があった。高校家庭科の男女必修が課題だった。担当として、文科省の研修会に数多く

参加したが、調査官の常套句は「不易と流行」。この改訂は「生涯学習・生きる力」などをキーワードとした時であり、生涯にわたり学習し続ける基礎を学校で養い、生きる力を育て考えてるところが「不易」、内容の指導方法は、状況により変えていく（流行）というものであった。

さて、これから改訂実施される新学習指導要領では、道徳が教科化される。評価の問題を曖昧にしたままの実施に危惧を抱くのは私だけだろうか。善悪・正邪の基本は不易だとしても、流行の部分が見えてこない。生徒も教員も枠内に納める方向に進行しているように感じてならない。

かつて、大学の教育実習の折、「教育とは何か」を真剣に考えていた時も、国の教育施策に言いようもない「枠づけ」を感じて悩んだ時期があった。そのことを思い出す。

改めて、人間とは・教育とは何か、不易と流行を踏まえて考えてみたい。

教育学部の変遷

こぼれ話(その二)



黒川 弘 (S28・3卒 千葉市)

学部の変遷を執筆するにあたり、久しぶりに「教育学部百年史」や「さらば亥鼻」を開き、改めて諸先輩のご努力や心意気に感動いたしました。また発祥の地・亥鼻台にも、二度三度と足を運びました。全学の職員・学生で宝くじを売り、その資金でプレハブ校舎を建てた小中台校地跡へも足をのばし、往時を偲びました。

新制大学は、最初の二年間で一般教養を、後半で専門分野を学ぶ仕組みになっていました。整備された校舎はありませんから、この講義は旧師範の教室、これは旧薬専教室でと、一つ一つ確認してから動かなければなりません。ゆとりはありませんが、他学部の学生とも交流があり、多くのことを学ぶことが出来ました。

亥鼻台校地は、現在公園化され、千葉県庁、県警本部、県文化会館をはじめ、千葉市街が手にとるように見える景勝の地にあります。わが同窓会の建立した記念碑、萩原碌山の「女」は、原型が国の重要文化財に指定されており、どの美術教科書に

も載っているほどの傑作です。貸し出し料が高価なこと、铸造は伊藤铸造所に限るなど制約が多いので、全国をみても数えるほどしかありません。台座には大きな筑波石が使われ、学部の沿革が記されています。

記念碑の近くには、浅見喜舟先生の筆跡碑「飛躍」があります。千葉県教育塔のほか、加瀬完先生の「教師とは 悲しきものか 老い一つもひとりひとりの児ら 忘れず」の碑もあります。

小中台校地は、現在、公民館、図書館、小中台小学校になっています。地区の建てた記念碑には、学生寮の記述のみで、千葉大学についての記述は、残念ながらありませんでした。松ヶ丘の農業実習地は、松ヶ丘中学校として活用されています。

気になりながら、女子師範、青年師範、分校校地のその後について、今回調査できなかったことは心残りです。(続く)



特別寄稿



音楽指導六十二年目の「今、思うこと」

千葉県少年少女オーケストラ

音楽監督 佐治 薫子

(S 31・3卒 木更津市)

私は一九三五年生まれなので、今年八十二歳になる。

私が尊敬し生きる力をいただいていた日野原重明先生が、七月十八日に、百五歳で亡くなられた。

「生涯現役」がモットーで、著作や講演、音楽活動も多い方だ。また聖路加国際病院名誉院長として、幅広い活動を続けてこられた功績は多大であり、誰にも真似の出来ることではない。

私は、先生の教えをもっと近くで沢山学びたいと考え、七十歳で「新老人の会」に入会し、全国の小学校で行っていた「いのちの授業」や、ミュージカル「葉っぱのフレディ」などを何度か見せていただいた。先生が子供たちと手をつなぎ、楽しそうに踊る姿は感動的で、私たちに「年齢ではない。やればできる。みんなで前進しよう」と言ってくれているような気がした。終演後は本にサインをし、一人一人と握手をして「今日は、ありがとう」と声をかけてくだ

さった。その時の柔らかで温かい手の感触は、今でも忘れられない。

特に記



憶に残るのは、先生の百歳を記念して開催された「新老人の会」の先生の行動だ。手摺のない階段をさつと上り、広い舞台を左右に歩きながら、マイク片手に一時間、堂々と講演されたことに驚かされた。二部では、千葉県少年少女オーケストラが演奏を行った。アンコールは、会場の全員で「ふるさと」を歌うことになった。先生は、またまた舞台に駆け上がり、表情豊かに指揮をされた。

会場いっぱいのお客様からは惜しみない拍手をいただいた。大きく手を振りながら足取り軽く舞台下手に消えて行った元気な様子

が、今でも目に浮かぶ。

私は音楽監督を仰せつかって二十二年目を迎えた。このオーケストラは、千葉県在住の十歳から二十歳までの百六十名で構成し、「よい音でよい演奏を」をモットーに練習に励んでいる。演奏活動は、定期演奏会を中心に地域演奏会や招待演奏会などの他、米韓独等海外での公演も多い。

今年の活動としては、八月に千葉県文化会館、東金文化会館、と二日続けて「千葉県少年少女オーケストラとアキラさんの大発見コンサート」を開催した。宮川彬良先生の指揮とピアノ、楽しい話は大変人気がある。

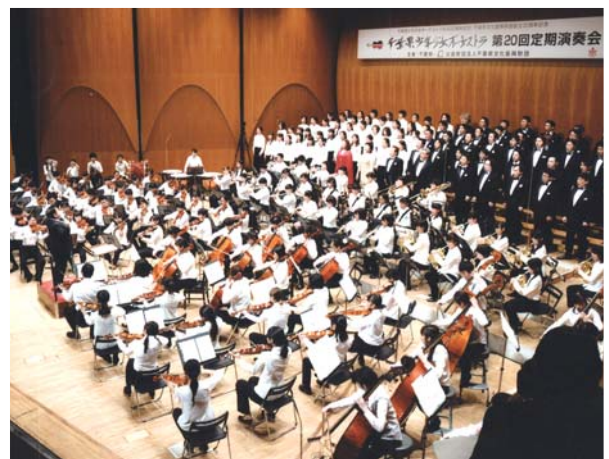
次は、九月十七日に行われた「夢の出会いコンサート」だ。千葉日報社のピアノコンクールで受賞した方々とのコンチェルトで、今年で二回目だった。若きソリストの将来が楽しみだ。

同月には、千葉・県民芸術祭「中央行事」があった。県からの急な



依頼だったので大変だった。

今は、三月二十五日に行われる第二十二回定期演奏会に向けて猛練習中だが、曲がシューベルトの「ロザムンデ」序曲、ベートーベンのピアノ協奏曲第四番、ブルックナーの交響曲第四番「ロマンチック」と難曲ばかりなので、小・中学生がとても苦労している。しかし、やり遂げなければならぬ。私は千葉大学という素晴らしい学舎で学んだことを誇りに思い、「大学憲章」のモットーである「つねに、より高きものをめざして」を、団員にも常に話し、最高の演奏を目指して練習に励んでいる。



「昔取った杵柄」は今も健在なり



浅野 脩
(S 39・3卒
香取地方)

「技術」の免許を取得し、地元の大規模中学校で技術一筋に十八年間勤務した。他の同期に比べて大変恵まれていた。

技術科の指導目標が「日常生活に役立つ技術技能の取得」だったので、「もの作り」を主に指導に当たった。教科の領域は、木工・金工・機械・電気・栽培等がある。

指導内容は、身の回りの生活と密接な関係にあり、生徒も意欲的に取り組んでいた。現在はDIYの傾向にあつて、「もの作り」に必要なものは、ホームセンター等で容易に入手できる時代になった。小生は、当時個人で揃えた用具を今も使用している。時々、近所の方から製作や修理の依頼で張合いがある。今、楽しく川釣り用具を製作中。「昔取った杵柄」は今も健在だ。

私の趣味 アラカルト

無から有を創造する楽しさ



加瀬 享生
(S 50・3卒
旭市)

生徒のやる気や可能性を伸ばすことが好きで教員になった私が、社会教育主事の資格を取り、教育委員会や青年の家で社会人を相手に仕事をするようになった。

学校と違い、毎日が新鮮であつたが、何か物足りなさを感じること多かつた。そんな中、子ども会や高齢者に『陶芸』を指導することになった『陶芸』初心者の私が、粘土から茶碗や皿を作る方法を教え、後日出来上がった作品を本人に届けることが仕事になった。自分の作品を嬉々として受け取る姿を見て、私も嬉しくなった。

今では、無(粘土)から有(作品)を造る楽しさを知り、地域のサークルで活動し、友達に皿や花瓶を差し上げて喜ばれている。



読者の声から

夢あふれる会報



鈴木 達三
(S 42・3卒
神奈川県横浜市)

毎号の会報に掲載されている千葉大学の徽章。時折思い出している口ずさむ千葉大学歌。およそ半世紀前の自分を振り返ることができる。稲毛の木造の校舎、西千葉の鉄筋の校舎。いくつかの部室が集まった文化財のような木造の校舎。楽しかった学生時代。まさに青春を謳歌した時の記憶が蘇る。徽章と大学歌は私の青春の証でもある。

会報一二六号に掲載された「現役の学生から・私の夢」を読み、感動を覚えた。特別支援教育教員養成課程で学ぶチャンゴックチャミーさんの文章だ。チャミーさんはベトナムからの留学生である。不慣れた日本での留学生活は、多くの困難が続いたことであろう。そのなか、自らの将来を見定め、不撓不屈の意気込みを溢れさせ、特別支援教育の教員になりたい。と……。将来は特別支援学校の設

立を夢見る。等、自分の将来設計を立てている姿に頼もしさを感じられた。

会報一二五号に教育学部附属特別支援学校の紹介があつたが、チャンゴックチャミーさんはこの附属学校で実習したものと想像している。何れにしても、教育学部のすばらしい環境の下に実習を重ねたことだろう。会報を通して教育学部のこれまでの発展と充実した環境に、羨望の眼を向けているところだ。

会報が大学の現状や様々な情報の提供と、同窓生の活躍の様子、さらに、私たちに夢と活力をいただけるよう期待している。

一緒に歌いましょう。

若い空 若い地

房総の 風は歌うよ

大洋の意気 寄せ来るところ

内海の和気だようところ

みよ 青春の 花のよろこび

千葉大学 心のふるさと

私はこの歌が

大好きだ。